

●今日の聖書でマタイはヘロデ王が、メシアの誕生の知らせを聞き、自分の地位が脅かされるのを恐れ、ベツレヘム一帯に住む2歳以下の男の子を虐殺し、そのため幼子イエスの一家はエジプトへの亡命、避難を余儀なくされた、という話を記しています。マタイはこれらの出来事が全て「預言者の預言の成就」だと繰り返し記しています。この悲劇が全て神の計画であったという意味なのでしょうか？

●よく今日の箇所を読んでみると、ヘロデの幼児虐殺に関しては「主が言われたことが実現する**ため**」ではなく「預言者によって言われたことが**実現した**」という表現で表されています。つまり、この残虐な出来事については、神ではなく人間の妬みや恐れが、残虐な行為につながり、それが結果として預言者の言葉を実現する事になってしまったのだと告げているのです。

聖書は人間の「悪」が引き起こす悲しい現実が確かにこの世にある事を告げます。しかし、また一方で、そのような悲惨な現実にも力強く働きかけ、なんとか私たちを救おうとする神の力が必ずあるのだという事を告げているのです。今日の箇所ではヘロデの残虐な行為と同時に、何とか貧しい夫婦と幼子イエスを救おうと夢を通して語りかける天使、神の働きかけが描かれています。

●現代看護の基礎を築いたフローレンス・ナイチンゲールは、「天使とは美しい花をまき散らす者ではなく、苦悩する者のために戦う者である」と述べました。彼女は、具体的な行動を通じて人々の痛みや苦しみに向き合い、それと共に戦う人生を示しました。

思えばイエス様も、「私を必要としているのは罪人だ」と語り、「罪人」とレッテルを貼られた人々、痛みや弱さを持つ人々のもとに寄り添われました。誕生からその死に至るまで、イエス様の生涯には、人のあらゆる苦しみに寄り添い、何とか励まし、立ち上がらせたいという神様の強い意志と願いが表されています。そのイエス様を主とする私たちキリスト者は、イエス様から励ましを受けつつ、自らも苦悩する者のために戦う者として召されています。神の愛と慰めを受けた私たちは、その愛を行動で示す使命を帯びているのです。

●昨年一年の歩みを振り返ると、私たちの様々な苦悩にイエス様が寄り添ってくださったことを覚えます。また、身近な誰かの優しさや励ましによって支えられ、歩むことができたことにも感謝したいと思います。この新しい年、私たち伊丹教会は、苦悩と共に歩んでくださった主の歩みに励まされながら、この世の「痛み」に寄り添い、一人ひとりが力強く神の愛を示す存在となれるよう励んでまいりたい、そう願います。